

中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』に見る唐詩の 特徴的な用法について (4)

佐藤 正光^{*1}・高橋 未来^{*2}・有木 大輔^{*3}・西村 諭^{*4}・長谷川真史^{*5}

中国古典学分野

(2018年8月27日受理)

要 旨

本稿は、唐詩における特殊な用法を分析するものである。唐宋から金元明の詩詞戯曲などには、時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言のたぐいが詠み込まれている。それは一般的な意味と異なるために、その特殊語彙（以下、異読と称する）の意味を把握しなければ精確な解釈には結びつかない。そこで平成27年度紀要より、異読の用法を多く記載する中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』から唐詩の用例を訳出し、検討を加えてきた。本稿では唐詩の用例に限って、中国語のピンイン表記によるAからZまでの30項目を訳出検討した。

検討の結果、一語に複数の品詞の用法を持つ語彙が多く見られた。また、現代の方言にまで保存されている語も見られる。全用例に共通して窺われることは、ここで提示される新たな異読は、おおむね対句や互文、音通などから導き出されているということである。

キーワード：唐詩，唐宋詞，異読，訓読，俗語，語彙解釈

はじめに

唐詩の語彙には、しばしば時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言のたぐいが見られる。それらの語彙（以下、異読と称する）は一般的な意味とは異なるが、日本の伝統的な訓読に異読語彙の意味が含まれていない場合、その特殊な意味を捉えきれないという問題があった。そこで唐詩の精確な解釈をめざして、張相著『詩詞曲語辭滙釈』（中華書局、1953年）その他を再編成し、異読語彙を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』から唐詩の特殊な用例を訳出検討している（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について」〔27年度紀要〕～佐藤正光・高橋未来・有木大輔・西村諭「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について (3)」〔29年度紀要〕）。

これまでの拙論では、唐詩に限らず宋元明までの詩詞及び戯曲を訳出してきたが、本稿では唐詩の用例をより深く検討するために、宋以後の詩詞曲は省いて唐までの詩詞を訳出することとした。

*1 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)
*2 茨城女子短期大学表現文化学科 (311-0114 那珂市東木倉960-2)
*3 筑波大学附属駒場中・高等学校 (154-0001 世田谷区池尻4-7-1)
*4 東京学芸大学附属国際中等教育学校 (178-0063 練馬区東大泉5-22-1)
*5 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野

唐詩に含まれる異読語彙の全体像を把握し、異読の文学的効果を検証することが目標である。本稿はその一環である。以下、唐詩の引用にはすべて『全唐詩』（中華書局、1960年）を用いている。

1. 芭棚 bā péng

葦の葉などを編んでかぶせて作った小屋。「芭」はまた「笆」「巴」に作る。司馬貞『史記索隱』¹「今江南葦籬を謂いて笆籬と曰う」、白居易²「買花（花を買う）」（『全唐詩』卷425）「上張幄幕庇，旁織巴籬護（上に幄幕を張りて庇い，旁らに巴籬を織りて護る）」、「巴」字下注に「一に笆に作る」とある。王貞³「芦葦」（『全唐詩』卷701）「未織巴籬護，幾拾邛竹扶（未だ巴籬を織りて護らず，幾邛竹⁴を拾げて扶く）」。「李逵負荊」の舞台になっているお店（飲み屋）は梁山泊付近にあり，利用可能な葦があることから考えると，「芭棚⁵」というのは木材で小屋を組み立て，上に葦を覆った一時的な小屋であると推察できる。現在でも農地で瓜を栽培したり屋外で作業するときに，同じようによくこのような小屋を組み立てて，日除けとしている。（西村）

2. 辺 biān

①方位詞，「中（うち）」に相当し，「あたり」の意味ではない。『樂府詩集』⁶ 卷45『讀曲歌』「千葉紅芙蓉，照灼綠水辺（千葉の紅芙蓉，照り灼く緑水の辺）」，意は「緑水中」と言うのと同じ。高適⁷「信安王幕府（信安王の幕府）」（『全唐詩』卷214）「大漠風沙裏，長城雨雪辺（大漠 風沙の裏，長城 雨雪の辺）」，「辺」は「裏」と互文で意味を表している。岑參⁸「晚發五渡（晩に五渡を發す）」（『全唐詩』卷200）「江村片雨外，野寺夕陽辺（江村 片雨の外，野寺 夕陽の辺）」，「辺」は「外」と対応している。杜甫⁹「自閬州領妻子却赴蜀山行（閬州より妻子を領して却つて蜀に赴かんとして山行す）三首」其一（『全唐詩』卷228）「我生無倚著，盡室畏途辺（我が生 倚著するところ無し，室を尽くす¹⁰ 畏途¹¹の辺）」，これは家族全員が流浪していることを言う。杜儼¹²「客中作」（『全唐詩』卷203）「容顏歲歲愁辺改，鄉國時時夢裏還（容顏 歲歲愁いの辺に改まり，鄉國 時時 夢の裏に還る）」。意味はいずれも上に同じ。また「吟辺」を見よ。

②方位詞，「上」の意。李白¹³「奔亡道中五首」其一（『全唐詩』卷181）「蘇武天山上，田橫海島辺（蘇武天山の上，田橫 海島の辺）」，宋之問¹⁴「三陽宮侍宴內制得幽字（三陽宮に侍宴す内制 幽字を得たり）」（『全唐詩』卷52）「岩辺樹色含風冷，石上泉聲帶雨秋（岩の辺の樹色 風を含みて冷ややかに，石の上の泉聲 雨を帯びて秋なり）」，孫逖¹⁵「夜宿浙江（夜 浙江に宿る）」（『全唐詩』卷118）「富春渚上潮未還，天姥岑辺月初落（富春渚上 潮未だ還らず，天姥岑辺 月初めて落つ）」，孟浩然¹⁶「荊門上張丞相（荊門にて張丞相に上る）」（『全唐詩』卷160）「日下瞻鳩翼，沙辺厭曝鳧（日下に鳩翼を瞻，沙辺に曝鳧¹⁷を厭う）」，高適「秋胡行」（『全唐詩』卷213）「三月垂楊蚕未眠，携籠結侶南陌辺（三月 垂楊 蚕 未だ眠らず，籠を携え侶を結ぶ南陌の辺）」，楊衡¹⁸「題玄和師仙藥室（玄和師の仙藥室に題す）」（『全唐詩』卷465）「山辺蕭寂室，石掩浮雲局（山辺 蕭寂なる室，石掩い浮雲局す）」，羅隱¹⁹「江南曲」（『全唐詩』卷19）「西陵路辺月悄悄，油壁輕車嫁蘇小（西陵路 月 悄悄，油壁²⁰の輕車 嫁ぎし蘇小²¹）」。

③方位詞，「下」「底」の意味。杜甫「歷歷」（『全唐詩』卷230）「巫峽西江外，秦城北斗辺（巫峽は西江の^{そと}外，秦城は北斗の^{もと}辺）」，「秦城」は長安を指す。古代の人は長安の真上に北斗星があると認識していたので，「北斗辺」とはつまり「北斗下」の意味となる。郭元振²²「宝剑篇」（『全唐詩』66卷）「何言中路遭棄捐，零落飄零古獄辺（何ぞ言わん中路にて棄捐に遭うと，零落飄零す 古獄の辺）」，思うに劍は豊城の獄舎の底（地面）を掘ったところにあり，獄舎のあたりにあったのではない（この故事は『晋書』張華伝²³に見える）。「古獄辺」とは「古獄の下」と同じである。李白「經乱後將避地剡中留贈崔宣城（乱を經し後 將に地を剡中に避けんとして 留めて崔宣城に贈る）」（『全唐詩』卷171）「猿近天上啼，人移月辺棹（猿は天上に近づきて啼き，人は月辺に移りて棹す）」，「辺」は「上」と対応させている。劉長卿²⁴「金陵西泊舟臨江樓（金陵の西に舟を泊め江樓に臨む）」（『全唐詩』卷149）「日暮望鄉處，雲辺江樹秋（日暮望郷の處，雲辺江樹秋なり）」。

④方位詞。「前」「全面」の意味。李白「古風五十九首」其四十六(『全唐詩』卷161)「鬪雞金宮裏, 蹴鞠瑤台辺(雞を鬪わす金宮の裏, 鞠を蹴る瑤台の辺)」、王翰²⁵「春女行」(『全唐詩』卷156)「忽聞黃鳥鳴且悲, 鏡辺含笑著春衣(忽ち聞く黄鳥鳴いて且つ悲しきを, 鏡辺笑みを含みて春衣を着る)」, いずれも「瑤台前」「鏡前」というのと同じ。盧藏用²⁶「九日幸臨涓亭登高应制得開字(九日 臨涓亭に幸して高きに登る应制 開字を得たり)」(『全唐詩』卷93)「萸依佩裏発, 菊向酒辺前²⁷(萸²⁸は佩裏に依りて発き, 菊は向かう酒辺の前)」, 「辺」は「裏」と対応し, 「辺前」は同じ意味を重ねた表現となっている。朱慶余²⁹「韓協律相送精舍讀書四韻奉寄呈陸補闕(韓協律 精舍に相送りて讀書す四韻 寄せ奉り陸補闕に呈す)」(『全唐詩』卷514)「何因陪夜坐, 清論諫臣辺(何に因りて夜坐到陪し, 清論もて臣辺に諫せん)」, 常建³⁰「古意三首」其一(『全唐詩』卷144)「過客設祠祭, 孤狸来坐辺(過客 祠祭を設け, 孤狸来たりて辺に坐す)」, 杜甫「雨不絶(雨絶えず)」(『全唐詩』卷229)「眼辺江舸何匆促, 未待安流逆浪帰(眼辺の江舸 何ぞ匆促たる, 未だ安流を待たず浪に逆らいて帰る)」, 『全唐詩』卷27雜曲歌辭「伊川歌・入破第二」「闕氏山上春光少, 相府庭辺馭使稀(闕氏の山上 春光少に, 相府の庭辺 馭使稀なり)」。

⑤広く一般的に某所を指し, はっきりと具体的な方位を指さない。意味は「処」と同じ。『先秦漢魏晉南北朝詩』³¹ 晋詩卷19「來夢曲」「君子防未然, 莫近嫌疑辺。瓜田不躡履, 李下不正冠(君子は未然に防ぎ, 嫌疑の辺に近づく莫し。瓜田に履を躡まず, 李下に冠を正さず)」, 杜甫「兩四首」其一(『全唐詩』卷230)「紫崖奔処黑, 白鳥去辺明(紫崖 奔る処に黒く, 白鳥 去る辺に明らかなり)」, 李白「擣衣篇」(『全唐詩』卷165)「君辺雲擁青糸騎, 妾処苔生紅粉楼(君が辺 雲は擁す 青糸の騎, 妾が処 苔は生ず 紅粉の楼)」, 「辺」と「処」といずれも互文である。王湾³²「次北固山下(北固山下に次る)」(『全唐詩』卷115)「郷書何処達, 帰雁洛陽辺(郷書 何れの処にか達す, 帰雁 洛陽の辺)」。

⑥時間を表す。「～時」「～際」の意味がある。岑参「送劉郎將帰河東(劉郎の將に河東に帰らんとするを送る)」(『全唐詩』卷200)「謝君賢主將, 豈忘輪台辺(君に謝す賢主將, 豈に忘れんや輪台³³の辺)」, 『全唐詩』編者注に「参曾北庭侍趙中丞, 故有下句(参 曾て北庭にて趙中丞に侍す, 故に下句有り)」, 二句は, 賢明な司令官に, あの輪台で過ごした時間をどうして忘れることができよう, と伝えようとする。(西村)

3. 便biàn

①ちょうど「雖」「縦」「就使(たとえ～としても)」と同じである。杜甫「送鄭十八虔貶台州司戸闕為面別(鄭十八虔の台州の司戸に貶せらるるを送る 面別を為すを闕く)」(『全唐詩』卷225)「便与先生応永訣, 九重泉路尽交期(便い先生と応に永訣すべきも, 九重の泉路 交期を尽くさん)」, 「便与」はちょうど「縦与」というのと同じである。たとえ永遠の別れとなろうとも, 九重の黄泉路で再会して交わりを結べば, 今日の面会して別れをなすことができなかつたことは悲しむことではない, ということ言う。おおむねこの種の「縦」字の解釈するもの, あるいは「就使」の解釈するものに作る「便」字は, 多く始めと終わりが呼応する句に用いることが多い。また859頁の「便做」「便做道」「做」の条を見よ。

②「豈」と同じである。

③「正」「恰」(ちょうど)の意。副詞。杜甫「玉台観」(『全唐詩』卷228)「更肯紅顔生羽翼, 便応黄髮老漁樵(更に肯て紅顔にして羽翼を生ぜんや, 便に応に黄髮もて漁樵に老ゆべし)」, この世に果たして顔が衰えず仙人となって空を飛ぶ術があるだろうか, この地で隠居して年老いていくより仕方がない, と言う。白居易「池上即事」(『全唐詩』卷450)「林下水辺無厭日, 便堪終老豈論年(林下水辺 厭う日無し, 便に終老に堪え豈に年を論ぜんや)」, 用法は杜甫の詩とほぼ同じである。陸龜蒙³⁴「自遣(自ら遣る)三十首」其四(『全唐詩』卷628)「終須揀取幽棲処, 老檜成双便作門(終に須く幽棲の処を揀取すべし, 老檜³⁵ 双を成して便に門を作す)」これは「正好作門(門とするのにちょうどよい)」と言うのと同じである。杜荀鶴³⁶「再經胡城県(再び胡城県を經)」(『全唐詩』卷693)「今來県宰加朱紱, 便是蒼生血染成(今來たれば県宰朱紱を加う, 便に是れ

蒼生の血に染まりて成る)」。

④「却」に相当し、変化・転換の語気を表す副詞。『玉台新詠』³⁷ 卷10近代雜歌三首「溱陽樂」[稽亭故人去，九里新人還。送一便迎兩，無有暫時閑（稽亭に故人去り，九里より新人還る。一を送りて便つて兩を迎う，暫時の閑有ること無し)。「便」，一に「却」に作る。(西村)

4. 並 bìng

①似ている(似)，～のようである(如)，まるで～のようである(像)，動詞。劉言史³⁸「広州王園寺伏日即事寄北中親友(広州王園寺 伏日³⁹ 即事 北中の親友に寄す)」(『全唐詩』卷468)「裏汗絺如濯，親床枕並燒(汗を裏みて絺濯うが如く，床に親づけば枕焼くるが並し)」，武元衡⁴⁰「送田三端公還鄂州(田三端公の鄂州に還るを送る)」(『全唐詩』卷317)「青油幕裏人如玉，黃鶴樓中月並鉤(青油幕⁴¹裏人玉の如く，黃鶴樓中月鉤の並し)」，皮日休⁴²「新秋言懷寄魯望三十韻(新秋懷いを言いて魯望⁴³に寄す三十韻)」(『全唐詩』卷612)「度日忘冠帶，經時憶酒肴。無⁴⁴心同木偶，無舌並金鏡(度日 冠帶を忘れ，經時 酒肴を憶う。心無きこと木偶に同じく，舌⁴⁵無きこと金鏡に並じ)」，「並」はいずれも「如」「同」と互文である。元稹⁴⁶「酬樂天東南行詩一百韻(樂天の東南行詩に酬ゆ一百韻)」(『全唐詩』卷407)「是非渾並漆，詞訟敢研朱(是非 渾て漆に並たり，詞訟 敢えて朱を研く)」，「全似漆(全て漆に似たり)」と言うのと同じである。戴叔倫⁴⁷「答孫常州見憶(孫常州に憶わるるに答う)」(『全唐詩』卷274)「画鷁⁴⁸春風裏，迢遙去若飛。那能寄相憶，不並子猷歸(鷁を画く春風の裏，迢遙として去ること飛ぶがごとし。相憶うを寄するをいかにすべき，子猷の歸るに並じからざるを)」，詩は王子猷が戴安道を訪ねる故事を用いており，どうしてただ詩を寄せて思いやるだけで，王子猷のように自ら訪ねないことがあるのか，という意である。鄭谷⁴⁹「蜀中三首」其三「子規夜夜啼辺樹，不並吳鄉楚国聞(子規 夜夜 辺樹に啼けども，吳郷楚国に聞くに並じからず)」，作者は袁州(今の江西省宜春市)の人で，もともと楚に属する地であった。詩句の意味は，子規の鳴き声は同じではあるが，蜀で聴くのは心の状態がまったく違うということと言う。「不並」はまたちょうど「不似」と同じである。沈佺期⁵⁰「王昭君」(『全唐詩』卷96)「嫁來胡地惡⁵¹，不並漢宮時(嫁ぎ来たれば胡地悪く，漢宮の時に並ず)」。(西村)

5. 博 bó

「換」の意味。白居易「曉寢」(『全唐詩』卷440)「鷄鳴一覺⁵²睡，不博早朝人(鷄鳴くも一たび覚めて睡る，早朝の人に博えず)」，羅隱「揚帝陵」(『全唐詩』卷657)「君王忍把平陳業，只博雷塘數畝田(君王忍び把る平陳⁵³の業，只だ雷塘⁵⁴數畝の田に博うのみ)」，「博」を「換」に作っているテキストもあり，「博」とはとりもなおさず「換」の意味である。(西村)

6. 薄劣 bó liè

もとは浅はかで愚かな意味で，変化して軽薄で聞き分けのないさまを指す意味となり，後さらに罵り言葉へと変化していった。謝靈運⁵⁵「九日從宋公戲馬台集送孔令(九日宋公の戲馬台の集に従い孔令を送る)」(『文選』⁵⁶ 卷20)「彼美丘園道，唱焉傷薄劣(彼の美なる丘園の道，唱焉として薄劣を傷む)」，杜甫「獨酌」(『全唐詩』卷226)「博劣慚真隱，幽偏得自怡(博劣 真隱に慚じ，幽偏 自ら怡しむを得)」，錢起⁵⁷「海上臥病寄王臨(海上に病に臥し王臨に寄す)」(『全唐詩』卷236)「百年去心慮，孤影守薄劣。獨余慕侶情，金石無休歇(百年 心慮を去り，孤影 薄劣を守る。獨り余 侶を慕う情，金石のごとく休歇すること無し)」，李端⁵⁸「慈恩寺懷旧」(『全唐詩』卷284)「彼蒼何曖昧，薄劣反居後(彼蒼何ぞ曖昧，薄劣反りて後に居り)」小序に「遺文在目，良友逝矣(遺文 目に在るも，良友逝けり)」，いずれも自らを謙遜していう語として用いている。宋元の時代まで，用法に変化があった。(西村)

7. 薄媚 bó mèi

詈辞 (ののしる), 放肆 (勝手気ままである), 搗蛋 (からむ・いたずらをする)。杜甫「少年行 (雜曲歌辞三首)」(『全唐詩』卷24)「馬上誰家薄媚郎, 臨階下馬坐人床。不通姓字粗豪甚, 指点銀瓶索酒嘗 (馬上 誰が家の薄媚の郎ならん, 階に臨んで馬より下り人の床に坐す。姓字を通ぜず粗豪なること甚し, 銀瓶を指点して酒を索めて嘗む)」、「薄媚」は「白面」に作るテキストもあるが、『樂府詩集』卷66も同様に「薄媚」に作っていることから、これに従うべきである。(西村)

8. 薄行 bó xíng

男が女性に対して薄情であること。「行」は去声に読む。杜甫「奉酬薛十二丈判官見贈 (薛十二丈判官の贈らるるに酬い奉る)」(『全唐詩』卷222)「襄王薄行迹, 莫学冷如丁 (襄王 薄行の迹, 学ぶ莫かれ冷如丁⁵⁹を)」。『杜詩鏡詮』⁶⁰卷16は、「薄」を「疏 (= 疎遠)」と解釈し, 「行迹 (= 往来)」とつなげて読む間違いを犯している。(西村)

9. 薄幸 bó xìng

薄情 (薄情者・浮気者) の意味。杜牧⁶¹「遣懷 (懐いを遣る)」(『全唐詩』卷524)「十年一覺揚州夢, 贏得青樓薄倖名 (十年一たび覺む揚州の夢, 贏ち得たり青樓薄倖の名)」。知己は妓女の旦那に対する名称である。(西村)

10. 不成 bù chéng

② 未能 (～しない) の意。杜甫「自閬州領妻子却赴蜀山行 (閬州より妻子を領して却って蜀に赴かんとして山行す) 三首」其一 (『全唐詩』卷228)「不成向南国, 復作游西川 (南国に向かうを成さず, 復た西川に遊ぶを作す)」, また「遣悶奉呈嚴公 (悶えを遣りて嚴公に呈し奉る) 二十韻」(『全唐詩』卷228)「不成尋別業, 未敢息微躬 (別業を尋ぬるを成さざれば, 未だ敢えて微躬を息わしめず)」, また「傷春五首」其三 (『全唐詩』卷228)「不成誅執法, 焉得變危機 (執法を誅するを成さずんば, 焉ぞ得ん危機を變ずるを)」, 「不成誅執法」は, 唐の代宗がまだ宦官の程元振を処刑できないことを指す。(西村)

11. 当 dāng

① 語氣助詞, 着 (～している) の意味。姚合⁶²「寄狄拾遺時為魏州從事 (狄拾遺に寄す, 時に魏州從事為り)」(『全唐詩』卷497)「睡当一席寬, 覺乃千里窄 (睡当一席寬く, 覺むれば乃ち千里窄し)」, 「睡当」は「睡着 (眠っている)」である。

② もと, これ, この。はたらきは指示代名詞と同じ。李白「少年行」(『全唐詩』卷165)「遮莫姻親連帝城, 不如当身自簪纓 (遮莫 姻親の帝城に連なるも, 当の身の自ら簪纓するに如かず)」, 「当身」は本人の意味。『董永変文』⁶³「慈耶得患身先故, 後乃便至阿孃亡, 殯葬之日無錢物, 所賣当身殯耶孃 (父は病を得て先に死に, 母もついで死にましたが, 葬る日にもお金がなく, この身売って父母を弔いました)」, 用法は上の例と同じ。「当身」の用法は後漢から見られる。『説苑』⁶⁴ 權謀「誠者隆至後世, 詐者当身而滅 (誠者は隆くして後世に至るも, 詐者は当の身にして滅ぶ)」。(高橋)

12. 到 dào

① 言う。羅虬⁶⁵「比紅兒詩」其十九 (『全唐詩』卷666)「従到世人都不識, 也應知有杜蘭香 (到うに従すも

世人都な識らず、也た^ま応に杜蘭香⁶⁶有るを知るべし)。到は一に「道」に作る。「従到」は「従道」であり、「従」の意味は「任」と同じなので、「道うに^{まか}せる」といっている。秦韜玉⁶⁷「問古（古を問う）」（『全唐詩』卷670）「都来総向人間看，直到皇天可是平（都来⁶⁸総じて人間を看れば，直だ^い到う 皇天 可是に平らかなりと）。「直到」は「直道」，「直道」は「簡直説（たしかにこのようだ）」の意味。李商隱⁶⁹「富平少侯」（『全唐詩』卷539）「七国三辺未到憂，十三身襲富平侯（七国三辺未だ憂いを^し到らず，十三にして身は富平侯⁷⁰を襲ぐ）」，「未到」は「不道」の意味，「不道」には「知らない」の意味がある，44頁の【不道】③を参照せよ。「未到憂」は「憂いを知らない」の意味である。

②かえって。到は倒の本字である。韋応物⁷¹「送元倉曹帰広陵（元倉曹の広陵に帰るを送る）」（『全唐詩』卷189）「旧国応無業，他郷到是帰（旧国 応に業無く，他郷 ^{かえ}到つて是れ帰るべし）。薛濤⁷²「贈遠（遠きに贈る）二首」其一（『全唐詩』卷803）「芙蓉新落蜀山秋，錦字開緘到是愁（芙蓉 新たに落つ 蜀山の秋，錦字 緘を開けば ^{かえ}到つて是れ愁う）」。（高橋）

13. 道 dào

①得る。呉融⁷³「華清宮二首」其一（『全唐詩』卷684）「緑樹碧簾⁷⁴相掩映，無人知道外辺寒（緑樹 碧簾 相い掩いて映じ，人の外辺の寒きを知り^う道無し）」，「知道」は「知り得る」である。

②是れ。白居易「覽盧子蒙侍御旧詩多与微之唱和感今傷昔因贈子蒙題于卷後（盧子蒙侍御の旧詩を覽るに，多く微之と唱和す。今を感じ昔を傷み，因つて子蒙に贈りて巻後に題せしむ）」（『全唐詩』卷459）「今日逢君開旧卷，卷中多道贈微之（今日 君に逢いて旧巻を開けば，巻中 多くは^い道れ微之に贈る）」，「多道」は「多くは是れ」である。また「南湖早春（南湖の早春）」（『全唐詩』卷440）「不道江南春不好，年年衰病減心情（^い道れ江南の春は好からざるにあらざるも，年年 衰病して心情を減ず）」，「不道」は「是れにあらざらず」である。また「東城春意（東城の春意）」（『全唐詩』卷441）「弦管随宜有，杯觴不道無。其如親故遠，無可共歡娛（弦管 宜しきに随いて有り，杯觴 ^い道れ無きにあらざらず。親故の遠くして，歡娛を共にすべき無きを^{いかん}其如せん）」，意味は上の例と同じ。

③到る。

④かえって。

⑤分かる，覚る。杜甫「嚴中丞枉駕見過（嚴中丞 駕を枉げ過ぎらる）」（『全唐詩』卷227）「寂寞江天雲霧裏，何人道有少微星（寂寞たる江天 雲霧の裏，何人か^う道らん少微星有るを）」，「道有」は「有るを知る」である。「少微星」とは，杜甫が自分のことを嚴武と比べて，嚴武に会えたことを感激している。李商隱「馬嵬二首」其一（『全唐詩』卷539）「君王若道能傾国，玉輦何由過馬嵬（君王 若し能く国を傾くと^し道らば，玉輦 何に由りてか馬嵬を過ぎらん）」，「若道」は「若し知る」である。清・姚培謙『李義山七律会意⁷⁵』詩「若早知尤物之能傾国，何至作馬嵬之行（若し早に尤物⁷⁶の能く国を傾くを知らば，何ぞ馬嵬の行を作すに至らんや）」，この「道」の字の解をよく理解している。

⑥判断する，推し量る，考える。曹松⁷⁷「南海旅次（南海にて旅に^{やど}次る）」（『全唐詩』卷717）「為客正当無雁処，故園誰道有書來（客と為りて正に雁無き処に当たれば，故園 誰か書の来たること有るを^{はか}道らん）」，「誰道」は「誰か料る」である。

⑦語気助詞。言いだし，または話し中に用いる。語気を強めるのみで，具体的な意味はない。

・【聞道】 wén dào 聞く，聞るところによると。杜甫「恨別（別れを恨む）」（『全唐詩』卷226）「聞道河陽近乘

勝，司徒急為破幽燕（^{きくなら}聞道く河陽近ごろ勝ちに乗ずと，司徒急ぎ為に幽燕を破れ），また「秋興八首」其四（『全唐詩』卷230）「聞道長安似弈棋，百年世事不勝悲（^{きくなら}聞道く長安 弈棋⁷⁸に似たりと，百年 世事 悲しみに勝えず）」。

・[信道] xìn dào①信得（信じる）。白居易「和高僕射罷節度讓尚書授少保分司喜遂游山水之作（高僕射が節度を罷めて尚書を讓り，少保分司を授けられ，喜びて遂に山水に遊ぶの作に和す）」（『全唐詩』卷454）「鞍轡鬧裝光滿路⁷⁹，何人信道是書生（鞍轡 鬧裝 光は路に滿つ，何人か^{しんずる}信道くは是れ書生なりと）」。

②信是（果たしてこのように）。（高橋）

14. 的的dí dí

①鮮やかな様。「灼灼」の意味。杜甫「宿白沙驛（初過湖南五里）（白沙驛に宿る〔初め湖の南に過ぎること五里〕）」（『全唐詩』卷233）「隨波無限月，的的近南溟（波に隨う無限の月，的的として南溟に近づく）」。李頻⁸⁰「府試老人星見（府試，老人星見わる）」（『全唐詩』卷589）「臨空遙的的，竟曉獨熒熒（空に臨みて遙かに的的たり，竟曉 獨り熒熒たり）」。元稹「月三十韻」（『全唐詩』卷408）「的的當歌扇，娟娟透舞衣（的的として歌扇に当たり，娟娟として舞衣に透る）」。馬戴⁸¹「同莊秀才宿鎮星觀（莊秀才と共に鎮星觀に宿る）」（『全唐詩』卷555）「的的星河落，露苔復灑松（的的として星河落ち，苔を露し復た松に灑ぐ）」。韓琮⁸²「興平野中得落星石移置鼎齋（興平野の野中にて落星石⁸³を得て鼎齋に移置す）」（『全唐詩』卷565）「的的墮芊蒼，茫茫不記年（的的として芊蒼⁸⁴に墮ち，茫茫として年を記さず）」，以上はみな星や月が白く光って明るい様子を描いている。杜牧「懷鍾陵旧游（鍾陵の旧游を懷う）四首」其三（『全唐詩』卷523）「白鷺煙分光的的，微漣風定翠恹恹（白鷺 煙分かちて光的的たり，微漣 風定まりて翠恹恹たり⁸⁵）」。高蟾⁸⁶「秋日北固晚望（秋日北固にて晩に望む）二首」其一（『全唐詩』卷668）「風含遠思條條晚，日照高情的的秋（風は遠思を含みて條條⁸⁷たる晩，日は高情⁸⁸を照らしての的的たる秋）」。吳融「西陵夜居」（『全唐詩』卷684）「漏永沈沈靜，灯孤的的清（漏永 沈沈⁸⁹として静かなり，灯孤 的的として清らかなり）」，以上はみな景物の明かりが清々しく明るい様子を描いている。

②「的」の重ね型。「的」には「確か」の意味があり，重ねて言うと意味が重くなる，的的確確（たしかに）実实在在（着実に）の意味。『玉台新詠』卷6王僧孺⁹⁰「為人述夢（人のために夢を述ぶ）」「已⁹¹知想成夢，未信夢如此。皎皎無片非，的的一皆是……及寤尽空無，方知悉虛詭（已に知る想の夢を成すを，未だ信せず夢の此くの如くなるを。皎皎として片非無く，的的として一に皆な是なり……寤むるに及びて尽く空無，方に知る 悉く虚詭なるを）」，「的的」の語は，上の句では「皎皎」と互文になり，下の句では「虚詭」と対になっている。『全唐詩』卷799趙氏「夫下第⁹²（夫下第す）」「良人的的有奇才，何事年年被放回（良人は的的として奇才有り，何事ぞ年年放回せらる）」。韓偓⁹³「無題」其一（『全唐詩』卷683）「手持双豆蔻，的的为東隣（手づから持つ双つの豆蔻，的的として東隣と為る）」。許渾⁹⁴「送李文明下第鄜州覲兄（李文明の下第して鄜州にて兄に覲うるを送る）」（『全唐詩』卷531）「的的遙相待，清風白露時（的的として遙かに相い待つ，清風 白露の時）」。

③的的確確（たしかに）実实在在（着実に）の意味の派生で，感情がひたむきでまじめ，節操が難いことをいう。「子夜歌四十二首⁹⁵」其三十五「我念飲的的，子行猶⁹⁶豫情。霧露隱芙蓉，見蓮不分明（我は飲を念うことの的なるも，子の行くこと猶豫の情あり。霧露は芙蓉を隠し，蓮を見るも分明ならず）」，「的的」と「猶豫」が対である。杜牧「春思」（『全唐詩』卷524）「豈君心的的，嗟我泪涓涓。綿羽啼來久，錦鱗書未伝（豈に君の心的的として，我が泪の涓涓⁹⁷たるを嗟かんや。綿羽啼きて來ること久しかれども，錦鱗の書未だ伝わらず）」。孟郊⁹⁸「摺友（友を摺ぶ）」（『全唐詩』卷374）「面無吝色容，心無詐憂惕。君子大道人，朝夕恒的的（面に吝色の容無く，心に詐憂の惕⁹⁹れ無し。君子は大道の人，朝夕 恒に的的たり）」。柳宗元⁹⁹「酬韶州裴曹長使君寄道州呂八大使因以見示二十韻一首（韶州の裴曹長使君に酬いて道州呂八大使に寄せ，因りて以て示さ

る二十韻一首) (『全唐詩』卷351) 「秉心方的的, 騰口任嘖嘖 (秉心¹⁰⁰方に的的たるも, 騰口^{ほしいまま}任に嘖嘖¹⁰¹)」。

④形容詞, 密度が高い, 頻度が高い, 数量が多いことを示す。密密 (ぎっしりと), 頻頻 (しきりと), 連連 (絶えず), 多多 (たくさん) などの意味。南朝の楽府民歌「華山畿¹⁰²二十五首」其十三「著処多遇羅, 的的往年少, 艶情何能多 (著処羅に遇うこと多し, 的的として往く年少, 艶情何ぞ能く多からんや)」、「羅」は妨げる, 「能」は「恁 (そのように)」と同じで, そのように, このように。一詩全体が娘の口調で, 彼女が外へ遊びに行くと, 至る所でしきりにやってくる若者に道を塞がれてつきまとわれる, このように期せずして訪れるロマンスはどうしてこうも多いのかと嘆かされるという。張説¹⁰³「遙同蔡起居偃松篇 (遙かに蔡起居の偃松篇に同じくす)」(『全唐詩』卷86)「懸池的的停華露, 偃蓋重重孤瑞雲 (懸池 的的として華露を止め, 偃蓋¹⁰⁴ 重重として瑞雲を払う)」。趙嘏¹⁰⁵「題昭応王明府溪亭 (昭応王の明府の溪亭に題す)」(『全唐詩』卷549)「曉渭澗檐帆的的, 晚原含雨樹重重 (曉渭 檐帆 度ること的的, 晚原 雨を含みて樹 重重たり)」。楊凝¹⁰⁶「与友人会 (友人と会す)」(『全唐詩』卷290)「蟬吟槐蕊落, 的的愁端。病覚離家遠, 貧知処事難 (蟬吟じて槐蕊落ち, 的的たるは是れ愁端なり。病みて家を離ること遠きを覚り, 貧しくして事を処すことの難きを知る)」。司空図¹⁰⁷「馮燕歌」(『全唐詩』卷634)「樹間春鳥知人意, 的的心期暗与伝 (樹間の春鳥 人の意を知らば, 的的として心に期す 暗かに与に伝えんことを)」。『全唐詩』卷787無名氏「霜菊」「華滋尚照灼, 幽氣含紛郁。的的冒空園, 萋萋被幽谷 (華滋 尚お照灼たり, 幽氣 紛郁を含む。的的として空園を冒し, 萋萋として幽谷に被る)」、首句で菊の鮮やかな様子をいっているので, 「的的」をまた「鮮やかな様子」の意味に解すべきではない, この句と下の句の「萋萋」はみな霜菊が多くて盛んな様子を表している。(高橋)

15. 丁寧 dīngníng

①慇懃である。精を出す, 仕事に励むの意味, 懇ろまたは真心がこもっているの意味, 頻繁または回数が多くて煩わしいの意味がある。何遜¹⁰⁸「贈族人秣陵兄弟 (族人の秣陵の兄弟に贈る)」(『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩)「吾宗昔多士, 文雅高搢紳。小子無學術, 丁寧困負薪 (吾が宗 昔 士多く, 文雅 搢紳高し。小子 學術無く, 丁寧にして負薪に困しむ)」、これは謙遜の語で, 賤役に精を出して苦しむことをいう。元稹「答姨兄胡靈之見寄 (姨兄胡靈之の寄せらるるに答う) 五十韻」(『全唐詩』卷406)「所期人拭目, 焉肯自佯盲。鉛鈍丁寧淬, 蕪荒展耘耕 (人の目を拭うを所期すれば, 焉ぞ肯えて自ら盲を佯らん。鉛鈍は丁寧^{いっつわ}に淬^{にら}ぎ¹⁰⁹, 蕪荒は展耘¹¹⁰して耕す)」、王仁裕¹¹¹「放猿 (猿を放つ)」(『全唐詩』卷736)「放爾丁寧復故林, 旧來行処好追尋 (爾を放つこと丁寧にして故林に復す, 旧來行く処追尋するに好し)」、意味はまた同じ。王仁裕の例は, 句の意味からすると語順を「丁寧放爾」にするべきである。韓愈¹¹²「華山女 (華山の女)」(『全唐詩』卷341)「仙梯難攀俗緣重, 浪憑青鳥通丁寧 (仙梯攀ち難く 俗緣重く, 浪りに青鳥¹¹³に憑りて丁寧を通ぜしめんとす)」。按ずるに『史記¹¹⁴』卷117 司馬相如伝に「相如乃使人重賜文君侍者通慇懃 (相如は乃ち人をして文君の侍者に重く賜わしめて慇懃を通ず)」の語があり, 発想はこの詩とほぼ同じである。故に「丁寧」はつまり感情, 情の意味である。王建¹¹⁵「鏡聽詞」(『全唐詩』卷298)「¹¹⁶ 摩挲嫁時鏡, 夫婿遠行憑鏡聽。回身不遣別人知, 人意丁寧鏡神聖 (摩挲す嫁時の鏡, 夫婿 遠行し鏡に憑りて聴く。身を回らせて別人をして知らしめず, 人意丁寧にして鏡神聖なり)」、これは形容詞の用法で, 懇ろの意味である。張籍¹¹⁷「臥疾 (疾に臥す)」(『全唐詩』卷383)「僮僕各憂愁, 杵臼無停聲。見我形憔悴¹¹⁸, 勸藥語丁寧 (僮僕各おの憂愁あるも, 杵臼 声を停むる無し。我が形の憔悴するを見, 藥を勧めて語は丁寧なり)」、意味はまた同じ。杜甫「絕句漫興九首」其一 (『全唐詩』卷227)「眼見客愁愁不醒, 無頼春色到江亭。即遣花飛¹¹⁹深造次, 便覺鶯語太丁寧 (眼に見る 客愁愁えて醒めざるを, 無頼の春色江亭に到る。即ち花をして飛ばしむること深かれども造次^{まなこ}¹²⁰なり, 便ち鶯の語るを覚るも太だ丁寧なり)」、これは頻繁という意味。趙次公注は「即便遣花飛去, 此所以為春之造次也……鶯亦惜花之飛而其語丁寧稠疊也 (即便ち花をして飛び去らしむるは, 此れ春の造次為る所以なり……鶯も亦た花の飛ぶを惜しみて其の語丁寧にして稠疊¹²¹なり)」。陸龜蒙「五歌」其二・水鳥 (『全唐詩』卷621)「鷗閑鶴散兩自遂, 意思不受人丁寧 (鷗は閑かに鶴は散じて兩つながら自ら遂らかなり, 意思 人の丁寧なるを受けず)」、鷗と鶴の興趣が人の世の煩わしい邪魔を受けないことをいう。

②形容詞, 仔細にあるいは明らかに。現代中国語の「言い聞かせる」の意味とは異なり, 字はまた「叮嚀」に作る。『敦煌掇瑣』五更転・太子入山修道贊¹²²「宮中聞喚太子声, 甚丁寧『我是四天王, 故来遠自迎』(宮中に太子を呼ぶ声が聞こえる, とてもはっきりと「わたしは四天王である, はるばる遠くから迎えに来たのだ」という)」、これは「とてもはっきりと言う」と同じ。(高橋)

16. 定 dīng

①助詞, 動詞の後につく。了(～しおわる)の意味。王建「長門」(『全唐詩』卷301)「長門閉定不求生, 燒却頭花卸却箏(長門閉じ定りて生を求めず, 頭花を燒却して箏を卸却す)」、これは閉じるという。

②語気助詞, 動詞の後につく。得(～て)の意味。

③語気助詞, 動詞の後につく。着(～ている)の意味。

④語気助詞, 動詞の後につく。住(～ている)の意味。王建「贈李愬僕射(李愬僕射に贈る)二首」其一(『全唐詩』卷301)「和雪翻營一夜行, 神旗凍定馬無声(雪に和し營を翻して一夜にして行き, 神旗凍り定馬に声無し)。」これは「凍住(凍っている)」という。

⑤疑問詞, 結局はの意味。韋応物「寒食日寄諸弟(寒食の日, 諸弟に寄す)」(『全唐詩』188)「聯騎定何時, 予今顔已老(聯騎定に何れの時ならん, 予今顔已に老いたり)」、 「定」の字を一に「竟」に作る, このことから「定」が「結局は」の意味を持つことが証明される。孟浩然「江上寄山陰崔少府国輔(江上にて山陰の崔少府国輔に寄す)」(『全唐詩』卷160)「山陰定遠近, 江上日相思(山陰定に遠近く, 江上日に相い思う)」。李白「新林浦阻風寄友人(新林浦にて風に阻まれて友人に寄す)」(『全唐詩』卷172)「歲物忽如此, 我来定幾時(歲物忽ち此の如し, 我来たるは定に幾時ならん)」、杜甫「將曉(將に曉けんとなす)二首」其二(『全唐詩』卷229)「歸朝日簪笏, 筋力定如何(歸朝すれば日に簪笏せんも, 筋力定に如何)」、施肩吾¹²³「對月憶嵩陽故人(月に対して嵩陽の故人を憶う)」(『全唐詩』卷494)「不知三十六峰前, 定為何處峰前客(知らず三十六峰前, 定に何處の峰前の客為らん)」、杜甫「第五弟豐独在江左近三四載寂無消息覓使寄此(第五弟豐 独り江左に在り, 近ごろ三四載, 寂として消息無く, 使いを覓めて此を寄す)二首」其二(『全唐詩』卷231)「聞汝依山寺, 杭州定越州(聞く汝が山寺に依ると, 杭州定には越州ならん)」、また「不離西閣(西閣を離れず)二首」其一(『全唐詩』卷229)「不知西閣意, 肯別定留人(知らず西閣の意, 肯て別れしむるや定に人を留むるや)」、結局は別れるのか留まるのかという。(高橋)

17. 動 dòng

①副詞, いつもの意味, 每每, 往往。杜甫「贈衛八処士(衛八処士に贈る)」(『全唐詩』卷216)「人生不相見, 動如參與商(人生相い見えざること, 動に参与商の如し)」、独孤及¹²⁴「海上寄蕭立(海上にて蕭立に寄す)」(『全唐詩』卷246)「索居動經秋, 再笑知曷月(索居 動に秋を経, 再び笑うは曷の月¹²⁵なるかを知らん)」、白居易「履道池上作(履道の池上の作)」(『全唐詩』卷451)「家池動作經旬別, 松竹琴魚好在無(家池動に作す 句を経るの別れ, 松竹琴魚 好在りや無や)」、韓愈「庭楸」(『全唐詩』卷342)「客来尚不見, 肯到權門前。權門衆所趨, 有客動百千(客来たるも尚お見えず, 肯て權門の前に到らんや。權門は衆の趨る所, 客有ること動に百千なり)」。

②副詞, すなわち(即, 便, 就)。主に前後する二つの動詞の間に, 前の語の内容により後の語の意味が決まるという働きが起きており, 動作の頻度を強調するのではない, ①の意味とは明らかに異なる。高適「送渾將軍出塞(渾將軍の塞を出づるを送る)」(『全唐詩』卷213)「意氣能甘万里去, 辛勤動¹²⁶作一年行(意氣は能く万里に去くに甘んじ, 辛勤 動ち一年の行を作す)」。劉商¹²⁷「隨陽雁歌送兄南游(隨陽雁の歌もて兄の南游

するを送る)」（『全唐詩』卷303）「去住応多両地情，東西動作経年別（去住 応に多かるべし両地の情，東西 動作 経年の別を作す）」。二つの例はともに、今の別れに際していう、だから「每每」「常常（いつも）と解することはできない、「動作」はともに「便作（すなわち作す）」である。元稹「感夢（夢に感ず）」（『全唐詩』卷404）「行吟坐歎知何極，影絶魂銷動隔年（行きては吟じ坐しては歎きて 何ぞ極むるを知らん，影絶え魂銷えて 動ち年を隔つ）」。張喬¹²⁸「題友人林齋（友人の林齋に題す）」（『全唐詩』卷639）「吾廬近溪島，憶別動経年（吾が廬は溪島に近し，別れを憶いて動ち年を経）」も、また特定の往事を回想しており、広く頻度を示すのではない。

③「多い」に通じる、「動」と「多」は一声の転化¹²⁹である。杜甫「黄河二首」其一（『全唐詩』卷228）「鉄馬長鳴不知数，胡人高鼻動成群（鉄馬長鳴して数を知らず，胡人 高鼻 群を成すこと動し）」、上下の二句はともに数量の多いことをいうのであり、頻度が高いことを強調するのではない。また「赤霄行」（『全唐詩』卷222）「丈夫垂名動万年，記憶細故非高賢（丈夫 名を垂れて万年なること動し，細故を記憶するは高賢に非ず）」、多くは万年に達するという。また「佳人」（『全唐詩』卷218）「摘花不挿髮，采柏動盈掬¹³⁰（花を摘むも髮に挿さず，柏を采りて掬に盈つること動し）」。また「寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻（岳州の賈司馬六丈，巴州の嚴八使君の兩閣老に寄す五十韻）」（『全唐詩』卷225）「親故行稀少，兵戈動接聯（親故行くゆく稀少なり，兵戈接聯すること動し）」。唐の顔真卿『顔魯公文集¹³¹』卷12「懷素上人草書歌序」「今礼部侍郎張公謂賞其不羈，引共遊処，兼好事者同作歌以贊之，動盈卷軸（今礼部侍郎張公謂は其の不羈を賞し，引きて共に遊処し，兼ねて好事者は同に歌を作りて以て之を賛え，卷軸に盈つること動し）」。

・【動便】 dòngbiàn 即ち，便ち，就ち。「動」に「便」の意味があるので，連ねて用いて同義の複合語ともなる。李珣¹³²「菩薩蛮」其三（『全唐詩』卷896）「楚天雲外路，動便経年去。香断画屏深，旧歡何処尋（楚天雲外の路，動便ち年を経て去る。香は画屏を断じて深く，旧歡 何処に尋ねん）」、またひとたび去るとすぐに年を経るといふ。【動】②を見よ。（高橋）

18. 独 dú

①副詞，なお（猶，還，仍）。杜甫「自京赴奉先県詠懷五百字（京より奉先県に赴く詠懷五百字）」（『全唐詩』卷216）「生常免租税，名不隸征伐。撫迹猶酸辛，平人固騷屑（生 常に租税を免れ，名は征伐に隸せず¹³³。迹を撫すれば猶お酸辛たり，平人固より騷屑¹³⁴ たらん）」。また「将曉¹³⁵（将に曉けんとす）」（『全唐詩』卷229）「猶聞蜀父老，不忘舜謳歌（猶お聞く蜀の父老の，舜を謳歌するを忘れざるを）」、二例中の「猶」はある版本ではともに「独」に作っており、「独」と「猶」が同義であることの証となる。「独」の意味が「猶」と同じ例は，杜甫の詩中になお「嚴氏溪放歌行（嚴氏溪の放歌行）」（『全唐詩』卷220）「劍南歲月不可度，辺頭公卿仍独驕（劍南の歲月 度るべからず，辺頭の公卿 仍独驕る）」とある，この句は「独」と「仍」を重ねて用いている。また「奉送魏六丈佑少府之交広（魏六丈佑少府の交広に之くを送り奉る）」（『全唐詩』卷223）「尚為諸侯客，独屈州県卑（尚お諸侯の客と為りて独お州県の卑なるに屈す）」、此の句は「独」と「尚」を対にする。また「上牛頭寺（牛頭寺に上る）」（『全唐詩』卷227）「何処鶯啼切，移時独未休（何処くにか鶯の啼くこと切なる，時を移して独お未だ休まず）」、また「追酬故高蜀州人日見寄（故の高蜀州の人日寄せらるるに追酬す）」（『全唐詩』卷223）「東西南北更堪¹³⁶ 論，白首扁舟病独存（東西南北 更に論ずるに堪えん，白首 扁舟 病みて独お存す）」、この詩は杜甫が高適の死後，高適がかつて贈ってきた詩を見ている。高適の贈詩に「愧爾東西南北人（爾が東西南北する人なるに愧づ）」という句が有り，この句では高適の詩から今に至るまで，自分は貧しく病気の身で漂泊することは昔のままという。「更堪論」は「豈堪論（どうして論ずるに堪えられようか）」、「病独存」は「病猶存（病は猶お癒えていない）」。また「江畔独歩尋花（江畔にて独り歩みて花を尋ぬ）七絶句」其一（『全唐詩』卷227）「走覓南隣愛酒伴，経句出飲独空牀（走りて南隣の酒を愛する伴を覓むれば，句を経て出でて飲みて独お空牀）」、下の句は，飲み友達が飲みに出たまま帰ってきていないことをいう。

②副詞。最も，特に。杜甫「題李尊師松樹障子歌（李尊師の松樹の障子に題するの歌）」（『全唐詩』卷219）

「老夫生平¹³⁷ 好奇古, 对此興与精靈聚。已知仙客意相親, 更覺良工心獨苦 (老夫生平 奇古を好む, 此に対して興 精靈と聚まる。已に知る 仙客の意 相い親しむを, 更に覺ゆ 良工の心 独も苦しむを)」、「仙客」は李尊師を, 「良工」は松樹の障子に絵を描いた画工をさす。また「遣興五首」其二 (『全唐詩』卷218)「昔者龐德公, 未曾入州府。襄陽耆旧間, 処士節獨苦 (昔者 龐德公, 未だ曾て州府に入らず。襄陽 耆旧¹³⁸の間, 処士 節 独も苦しむ)」。また「南池」(『全唐詩』卷220)「清源多衆魚, 遠岸富喬木。独歎楓香林, 春時好顔色 (清源 衆魚多く, 遠岸 喬木富む。独に歎ず 楓香の林, 春時 顔色好しきを)」。また「送許八拾遺婦江寧觀省甫昔時嘗客遊此県於許生処乞瓦棺寺維摩図様志諸篇末 (許八拾遺の江寧に帰り觀省するを送る, 甫は昔時嘗て此の県に客遊し, 許生の処に於いて瓦棺寺の維摩の図様を乞う, 諸を篇末に志す)」(『全唐詩』卷225)「看画曾飢渴, 追蹤恨淼茫。虎頭金粟影, 神妙独難忘 (画を看るに曾て飢渴, 蹤を追うも淼茫たるを恨む。虎頭の金粟の影, 神妙 独に忘れ難し)。「虎頭金粟影」は, 顧愷之の維摩詰を描いた図を表す。

③副詞。却って。転折を表す。杜甫「投贈哥舒開府 (哥舒開府に投贈す) 二十韻」(『全唐詩』卷224)「壯節初題柱, 生涯独轉蓬 (壯節 初め柱に題するも, 生涯 独つて転蓬す)。「題柱」とは司馬相如が橋柱に「不乘駟馬車, 不復過此橋 (駟馬車に乗らざれば, 復た此の橋を過ぎず)」と書き付けた故事に拠る。これは壮年の時には立身出世を目指していたが, 今となつてはかえって生涯放浪していることをいう。また「贈¹³⁹ 劉峽州伯華使君 (劉峽州伯華使君に贈る) 四十韻」(『全唐詩』卷230)「老兄真不墜, 小子独無承 (老兄 真に墜ちざるも, 小子独つて承くる無し)。「奉先劉少府新画山水障歌 (奉先の劉少府の新たに画きし山水の障の歌)」(『全唐詩』卷216)「若耶溪, 雲門寺, 吾独胡為在泥滓 (若耶溪, 雲門寺, 吾独つて 胡為れぞ泥滓に在るや)。「新安吏 (新安の吏)」(『全唐詩』卷217)「肥男有母送, 瘦男独伶俜 (肥男は母の送る有り, 瘦男独つて伶俜たり)。「独」のこの三種の意味は, 唐人の他の作品にも有る。白居易「新豊折臂翁 (新豊の臂を折る翁)・戒辺功也 (辺功を戒むるなり)」(『全唐詩』卷426)「痛不眠, 終不悔, 且喜老身今独在 (痛みて眠らざるも, 終に悔いず, 且つ喜ぶ 老身今独お在るを)。「独」の意味は「猶」と同じ。岑参「衛節度赤驃馬歌 (衛節度の赤驃馬の歌)」(『全唐詩』卷199)「櫪上看時独意氣, 衆中牽出偏雄豪 (櫪¹⁴⁰ 上に見る時独も意氣あり, 衆中より牽き出だせば偏えに雄豪なり)。「独」の意味は「最」と同じ, 「偏」と対である。白居易「和答詩十首」其四・和大觜烏 (大觜烏に和す) (『全唐詩』卷425)「貪烏占栖息, 慈烏独不容 (貪烏は栖息を占め, 慈烏は独つて容れられず)。「独」の意味は「却」と同じ。(高橋)

19. 度 dù

動詞, 送る。韓翃¹⁴¹「送高員外赴淄青使幕 (高員外の淄青の使幕に赴くを送る)」(『全唐詩』卷244)「山駅嘗官酒, 関城度客衣 (山駅に官酒を嘗み, 関城に客衣を度る)」。李紳¹⁴²「新樓詩二十首」其十五・城上薔薇 (城上の薔薇) (『全唐詩』卷481)「新蕊度香翻宿蝶, 密房飄影戲晨禽 (新蕊 香を度りて宿蝶翻り, 密房 影を飄して晨禽戯る)」。顧非熊¹⁴³「出塞即事二首」其一 (『全唐詩』卷509)「河上月沈鴻雁起, 磧中風度犬羊膾 (河上 月沈みて鴻雁起き, 磧中 風度る 犬羊の膾きを)」。温庭筠¹⁴⁴「齊宮」(『全唐詩』卷577)「粉香随笑度, 鬢態伴愁來 (粉香 笑に随いて度り, 鬢態 愁いを伴いて來たる)」。意味は上の例と同じ。(高橋)

20. 貪 tān

①動詞。意味は「欲す」と同じ。杜甫「送李八秘書赴杜相公幕 (李八秘書の杜相公の幕に赴くを送る)」(『全唐詩』卷231)「貪趨相府今晨發, 恐失佳期後命催 (相府に趨かんと貪して今晨 發し, 恐る 佳期を失いて後命の催さんことを)」。杜甫「北風」(『全唐詩』卷233)「滌除貪破浪, 愁絶付摧枯 (滌除すれば破浪を貪するも, 愁絶す 摧枯¹⁴⁵に付するを)」、仇注に「(北風) 滌除瘴氣, 方思破浪南行, 奈風急可愁, 不敢付之摧枯也 ((北風は) 瘴氣を滌除し, 方に思う 破浪南行し, 奈ぞ風 急にして愁う可けん, 敢えて之を摧枯に付せざるなり)¹⁴⁶、「貪破浪」は「欲破浪」である。韓愈「詠雪贈張籍 (雪を詠じて張籍に贈る)」(『全唐詩』卷343)「威貪陵布被, 光肯離金疊 (威は布被¹⁴⁷を陵がんと貪し, 光は肯えて金疊を離れんや)」、大意は, 雪というもののは貧士を凌辱しようとするものだが金持ちにとっては興を添えるものであるということ。劉禹錫¹⁴⁸

「鶴嘆二首」其二（『全唐詩』卷357）「主人朝謁早，貪養汝南鷄（主人 朝謁すること早く，汝南鷄を養わんと貪す）。劉禹錫「送太常蕭博士棄官歸養赴東都（太常蕭博士 官を棄て帰養¹⁴⁹し，東都に赴かんとするに送る）」（『全唐詩』卷611）「貪榮五綵服，遂掛兩梁冠（榮えんと貪す 五綵の服，遂に兩梁の冠¹⁵⁰を掛く）」、これは親を世話するため官を辞めようとする事。

②名詞。意味は「欲（慾）」と同じ。柳宗元「戲題石門長老東軒（戯れに石門の長老の東軒に題す）」（『全唐詩』卷352）「如今七十自忘機，貪愛都忘筋力微（如今 七十にして自ら機を忘れ，貪と愛と 都て忘れて筋力 微なり）」。（有木）

21. 討tǎo

尋ねる，覚める。杜甫「憶昔行」（『全唐詩』卷223）「更討衡陽董煉師，南浮早鼓湘江柂¹⁵¹（更に衡陽の董煉師を討め，南のかた浮びて早く湘江の柂を鼓せん）」、「討」はあるいは「覓」に作り，「討」は「覓める」である。また「贈李白（李白に贈る）」（『全唐詩』卷216）「李侯金閨彦，脱身事幽討。亦有梁宋遊，方期拾瑤草（李侯は金閨の彦¹⁵²，身を脱して幽討を事とす。亦た梁宋の遊有り，方に瑤草を拾うを期す）」、「幽討」とは世俗から離れた境地を訪問すること。李白「江上望皖公山（江上にて皖公山を望む）」（『全唐詩』卷180）「但愛茲嶺高，何由討靈異（但だ愛す 茲の嶺の高きを，何に由って靈異を討ねん）」、意味は靈異の跡を探し尋ねること。許宣平¹⁵³「見李白題壁詩又吟¹⁵⁴（李白の題壁詩を見て又た吟ず）」（『全唐詩』卷860）「又被人来尋討著，移庵不免更深居（又た人の来たりて尋討ね著けられ，庵を移すに更に深居を免れず）」、「尋」と「訪」とは同義で，重ねて言う。寒山¹⁵⁵「無題」198（『全唐詩』卷806）「明月照時常皎潔，不勞尋討問西東（明月 照らす時 常に皎潔たり，尋討ねて西東を問うを勞せず）」。（有木）

22. 特地tèdì

①特別である。羅隱「汴河」（『全唐詩』卷655）「當時天子是閑遊，今日行人特地愁（當時の天子 是れ閑遊なり，今日の行人 特地に愁う）」、「特地」は「特別である」こと，「閑」字と相對する。「閑」は等閑であること。當時の煬帝はのどかに遊幸したが，現在の旅人は旅の苦勞があるので，とりわけ憂鬱になるのである。羅鄴¹⁵⁶「公子行」（『全唐詩』卷654）「金鞍玉勒照花明，過後香風特地生（金鞍 玉勒 花を照らして明らかかり，過ぎりて後 香風 特地に生ず）」、これも「特別」の意味。

②特に，あるいはわざわざ。杜甫「陪柏中丞觀宴將士（柏中丞に陪して將士を宴するを觀る）二首」其一（『全唐詩』卷231）「幾時來翠節，特地引紅粧（幾時か翠節來たり，特地に紅粧を引かん）」、これは「わざわざ」と解釈できる。

③副詞，にわかに，急に。羅鄴「大散嶺」（『全唐詩』卷654）「過往長逢日色稀，雪花如掌撲行衣。嶺頭却望人來處，特地身疑是鳥飛（過往 長に逢う 日色 稀にして，雪花 掌の行衣を撲つが如きを。嶺頭 却って望む 人の來たる處，特地に身は疑う是れ鳥の飛ぶかと）」、これは山の高いことを描写し，意味は山頂に登って下を望み，急に体が飛ぶ鳥の感覺になったという。李涉¹⁵⁷「逢旧（旧に逢う）二首」其一（『全唐詩』卷477）「不期陵谷遷朝市，今日遼東特地逢（期せず 陵谷より朝市に遷り，今日 遼東にて特地に逢うを)」。方干¹⁵⁸「塩官王長官新創瑞隱亭（塩官王長官 新たに瑞隱亭を創る）」（『全唐詩』卷651）「孤雲恋石尋常住，落絮縈風特地飛（孤雲 恋石 尋常に住まり，落絮 縈風 特地に飛ぶ）」、「尋常」は「常に」をいい，「特地」と對である。韓愈「夕次壽陽驛題吳郎中詩後（夕べに壽陽驛に次り，吳郎中の詩後に題す）」（『全唐詩』卷344）「風光欲動別長安，春半城辺特地寒（風光 動かんと欲して長安に別る，春半 城辺 特地に寒し)」。杜牧「題茶山（茶山に題す）」（『全唐詩』卷522）「等級雲峰峻，寬平洞府開。扈天聞笑語，特地見樓台（等級雲峰 峻く，寬平 洞府 開く。天を扈いて笑語を聞き，特地に樓台を見る)」。

・[特] tè 意味は「特地③」と同じ。「特地」は語尾の「地」を取り除いて「特」字を単独で用いる。
 蔡希寂¹⁵⁹「贈張敬微(張敬微に贈る)」(『全唐詩』卷144)「大河東北望桃林, 雜樹冥冥結翠陰。不知君作神仙尉, 特訝行來雲霧深(大河 東北 桃林を望み, 雜樹 冥冥として翠陰¹⁶⁰を結ぶ。知らず 君 神仙の尉と作り, 特に訝しむ 行來の雲霧の深さを)。(有木)

23. 頭tóu

①「身」の意味を表すことができる。郭在貽『魏晉南北朝史書語詞瑣記』¹⁶¹の「長頭」の項に頭には身体の意味があり, 『後漢書』卷36「賈逵伝」に「逵……身長八尺二寸, 諸儒為之語曰「問事不休賈長頭。」(逵……身長八尺二寸, 諸儒 之が為めに語りて曰く, 「問事不休¹⁶²の賈長頭」と)」を引いて, 漢魏からすでに見える。「頭」のこの用法は修辭の過程から新しい意味を誘発しているにちがひなく, 頭の部分が身体全体を代用する。「抽頭」は体を引き出すことで, 「出頭」は体を抜き出すことである。王梵志¹⁶³「身臥空堂内(身は空堂の内に臥す)」(『王梵志詩集』卷2)「身臥空堂内, 独立令人怕。我今避頭去, 抛却空閑舍(身は空堂の内に臥し, 独り坐し人をして怕れしむ。我は今 頭を避けて去り, 空しき閑舎に抛却す)」、「避頭」は体をどける, あるいは体を引き出すこと。また「富者弃棺木(富者は棺木を弃す)」(『王梵志詩集』卷1)「智者入西方, 愚人墮地獄。掇頭入苦海, 冥冥不自覺(智者は西方に入り, 愚人は地獄に墮つ。頭を掇りて苦海に入り, 冥冥として自ら覚めず)」、「掇頭」も体を投げ出すこと。

②「時」の意味を表し, 多くは時間を表す言葉の後に続き, 魏晉以来からある口語中の用法である。唐・李頎¹⁶⁴「魏倉曹東堂櫻樹(魏倉曹の東堂の櫻樹)」(『全唐詩』卷133)「愛君双櫻一樹奇, 千葉齊生万葉垂。長頭扞石帶煙雨, 独立空山人莫知(愛す 君が双櫻一樹の奇にして, 千葉齊しく生ずるも万葉垂るるを。長頭に石を扞いて煙雨を帯び, 独り空山に立ちて人の知る莫し)」、「長」は「常」に通じ, 「長頭」は常時, 常に。『王梵志詩校輯』039首「家中漸漸貧(家中漸漸として貧す)」(『王梵志詩集』卷2)「家中漸漸貧, 良由慵懶婦。長頭愛床坐, 飽喫没娑肚(家中 漸漸として貧し, 良に慵懶の婦に由る。長頭に床坐を愛し, 飽喫して肚を没娑¹⁶⁵す)」、また272首「富兒少男女(富兒に男女少なし)」(『王梵志詩集』卷5)「富兒少男女, 窮漢生一群。身上無衣挂, 長頭草里蹲(富兒に男女少なし, 窮漢¹⁶⁶に一群を生ず。身上に衣挂無く, 長頭に草里に蹲る)」、意味もまた同じ。顧況¹⁶⁷「洛陽早春」(『全唐詩』卷266)「一家千里外, 百舌五更頭(一家 千里の外, 百舌 五更の頭)」、韓偓「惜春(春を惜しむ)」(『全唐詩』卷682)「一夜雨声三月尽, 万般人事五更頭(一夜の雨声 三月に尽き, 万般の人事 五更の頭)」。

③方向詞, 上や中などの方位を表す。盧仝¹⁶⁸「苦雪寄退之(雪に苦しみて退之に寄す)」(『全唐詩』卷389)「市頭博米不用物, 酒店買酒不肯賒(市頭 米を博うる¹⁶⁹に物を用いず, 酒店 酒をかうに賒¹⁷⁰を肯ぜず)」、姚合「送僧遊辺(僧の辺に遊ぶを送る)」(『全唐詩』卷496)「師向辺頭去, 辺人業障輕(師は辺頭に向いて去り, 辺人の業障¹⁷¹ 輕し)」、張籍「蠻州」(『全唐詩』卷386)「瘴水蠻中入洞流, 人家多住竹棚頭(瘴水は蠻中の洞に入りて流れ, 人家は多く竹棚の頭に住む)」、王建「華嶽廟二首」其一(『全唐詩』卷301)「上廟參天今見在, 夜頭風起覺神來(廟に上りて天に参りて 今 見在し, 夜の頭 風起こりて神を覚え來たり)」、四つの例は市の上, 辺の上, 竹棚の中, 夜の間をいい, この用法はほぼ現代の「床頭(枕元)」、「心頭(胸中)」のたぐいに同じ。

④方向詞, 辺りやそばの位置を表す。杜甫「兵車行」(『全唐詩』卷216)「君不見, 青海頭, 古來白骨無人収(君見ずや, 青海の頭, 古來白骨 人の収むる無きを)」、これは青海のあたり, 青海のそばをいう。劉長卿「漢陽獻李相公(漢陽にて李相公に獻ず)」(『全唐詩』卷151)「退身高臥楚城幽, 獨掩閑門漢水頭(身を退きて高く臥す 楚城の幽なるを, 独り閑門を掩う 漢水の頭)」、徐延壽¹⁷²「南州行」(『全唐詩』卷114)「河頭浣衣處, 無數紫鴛鴦(河の頭 衣を浣う處, 無數の紫鴛鴦)」、李益¹⁷³「獻劉濟(劉濟に獻ず)」(『全唐詩』卷283)「雁歸天北畔, 春盡海西頭(雁は歸る 天北の畔, 春は尽く 海西の頭)」、劉商「胡笳十八拍」(『全唐詩』卷303)「水頭宿兮草頭坐, 風吹漢地衣裳破(水の頭の宿 草の頭に坐し, 風は漢地に吹きて衣裳破る)」、

花蕊夫人徐氏¹⁷⁴「宮詞」(『全唐詩』卷798)「今宵駕幸池頭宿, 排比椒房得暖無(今宵 駕幸す 池の頭の宿, 椒房を排比して暖を得るや無きや)」, 戎昱¹⁷⁵「玉台題湖上亭(玉台体 湖上亭に題す)」(『全唐詩』卷270)「湖入県西辺, 湖頭勝事偏(湖は県西の辺に入り, 湖の頭は勝事偏し)」。(有木)

24. 透 tòu

①動詞, 到ることをいう。崔立之¹⁷⁶「曲池潔寒流(曲池 寒流を潔む)」(『全唐詩』卷347)「透底何澄澈, 回流乍曲盤(底に透れば何ぞ澄澈ならん, 回流するも乍ち曲盤¹⁷⁷す)」, 意味は池の水が底まで澄み切っていること。

②形容詞, 多いことをいう。李煜¹⁷⁸「浣溪沙」(『全唐詩』卷889)「紅日已高三丈透, 金鑪次第添香獸(紅日¹⁷⁹ 已に高きこと三丈の透き, 金鑪 次第に香獸に添う)」, 「三丈透」の意は「三丈あまり」のこと。(有木)

25. 図 tú

文語の「欲」「須」, 白話の「要」「想」に相当する, 助動詞。用法は「貴」とほぼ同じ。253頁「貴」を参照。白居易「春夜宴席上戲贈裴淄川(春夜 宴席上にて戯れに裴淄川に贈る)」(『全唐詩』卷456)「留君到曉無他意, 図向君前作少年(君を留めて曉に到るは他意無し, 君が前に向って少年と作らんと図す)」, 「図向」は「向わんと欲す」「向うを要む」。戎昱「花下宴送鄭鍊師(花の下に宴して鄭鍊師を送る)」(『全唐詩』卷270)「貴看花柳色, 図放別離心(花柳の色を看んと貴し, 別離の心を放たんと図す)」, 「貴」と「図」は互文である。秦韜玉「牡丹」(『全唐詩』卷670)「図把一春皆占斷, 故留三月始教開(一春を把らんと図せば皆占斷¹⁷⁹す, 故に留むること三月 始めて開かしむ)」。(有木)

26. 團 tuán

見計らう, 推測する。韓愈「南山詩」(『全唐詩』卷336)「團辭試提挈, 挂一念万漏(辭を団りて試みに提挈し, 一を掛けて万の漏るるを念う)」, 意味はおおよその言葉によってその大綱をとりまとめたとしても, 一を取り上げながらも万を漏らし落としてしまうことを憂うをいう。(有木)

27. 栽 zāi

①名詞, 苗。杜甫「詣徐卿覓果栽(徐卿に詣りて果の栽を覓む)」(『全唐詩』卷226)「草堂少花今欲栽, 不問綠李与黃梅(草堂花少なくして今栽を欲す, 問わず 綠李と黃梅と)」。「憑何十一少府豈覺檀木栽(何十一少府豈に憑りて檀木の栽を覓む)」(『全唐詩』卷226)「飽聞檀木三年大, 与致溪辺十畝陰(飽くまで聞く檀木は三年にして大なるを。与に致せ 溪辺十畝の陰)」。「憑韋少府班覓松樹子栽(韋少府班に憑りて松樹子の栽を覓む)」(『全唐詩』卷226)「欲存老蓋千年意, 為覓霜根数寸栽(存せんと欲す 老蓋千年の意, 為に覓む 霜根数寸の栽)」。「蕭八明府実処覓桃栽(蕭八明府実の処に桃の栽を覓む)」(『全唐詩』卷226)「奉乞桃栽一百根, 春前為送浣花村(乞い奉る 桃栽一百根, 春前為に送れ浣花村)」。『杜詩詳註』卷9 仇兆鰲注「桃栽, 猶俗云桃秧, 檀栽, 松栽亦然。(桃栽, 猶お俗に云う「桃秧」のごとく, 「檀栽」「松栽」も亦た然り)」, これら数首はみな成都において草堂を編んでいた頃の作で, その中の「松樹子」は蜀方言であり, 「松樹子秧(松の苗木)」のことである。現在の四川省西部等の地域では今なお「樹」を「樹子」と称する。「子」は接尾語で幼少の意味ではない。「栽」を苗と解する例は, この他にも唐詩に少なからず用例が見られる。白居易「送李校書趁寒食歸義興山居(李校書の寒食を趁ひて義興の山居に帰るを送る)」(『全唐詩』卷443)「大見騰騰詩酒客, 不憂生計似君稀。到舍將何作寒食, 満船唯載樹栽歸(大いに騰騰たる酒客を見るに, 生計を憂えざること君の似きは稀なり。舍に到りて何を將て寒食を作す, 満船唯だ樹の栽を載せて歸る)」。元稹「花栽二首」其一(『全唐詩』卷414)「買得山花一兩栽, 離鄉別土易摧頽(買得たり山花一兩栽, 郷を離れ土に別れば摧頽し易

し)。このうち「樹栽」「花栽」はみな「樹秧」「花秧」(木や花の苗)と同様である。

②「枝」や「株」の意をあらわし、一般的に数量詞として用いられる。この種の用法は上述(【栽】①)の名詞的用法と関連していると考えられる。徐陵¹⁸⁰「梅花落」(『樂府詩集』卷24・横吹歌辞)「对戸一株梅, 新花落故栽(戸に対す一株の梅, 新花 故栽に落つ)。「故栽」は「故枝」と同様。薛能¹⁸¹「過象耳山(象耳山に過る)二首 其一」(『全唐詩』卷561)「一色青松幾万栽, 異香薰路帯花開(一色の青松 幾万栽, 異香 路に薫りて花の開くに帯る)」これは「幾万株」と同様。(長谷川)

28. 在 zài

①助詞。「着」「得」¹⁸²と同様。杜甫「江畔独步尋花七絶句 其二」(『全唐詩』卷227)「詩酒尚堪驅使在, 未須料理白頭人(詩酒尚ほ驅使せらるるに堪在え, 未だ須いず白頭の人を料理するを)。白居易「酬別微之(微之に酬い別る)」(『全唐詩』卷451)「且喜筋骸俱健在, 勿嫌須鬢各皤然(且らく筋骸俱に健在やかなるを喜び, 須鬢の各おの皤然たるを嫌うこと勿れ)。「健在」は「健着」と同様で, 「然」字と対をなす。白居易「和韓侍郎題楊舍人林池見寄(韓侍郎の楊舍人の林池に題して寄せらるるに和す)」(『全唐詩』卷442)「鳳池冷暖君諳在, 二月因何更有氷(鳳池の冷暖は君諳在んじ, 二月何に因りて更に氷有らん)。「諳在」は「諳得(知り尽くしている)」と同様。白居易「郡中閑独寄微之及崔湖州(郡中閑独 微之に寄せ, 崔湖州に及ぶ)」(『全唐詩』卷447)「兩処也應相憶在, 官高年長少情親(兩処也た應に相憶いて在るべく, 官高く年長じ情親少なし)。「憶在」は「憶着」「憶得」と同様。白居易「与夢得同登棲靈塔(夢得と共に棲靈塔に登る)」(『全唐詩』卷447)「共憐筋力猶堪在, 上到棲靈第九層(共に憐れむ 筋力猶お堪在うるを, 上りて棲靈第九層に到る)。「堪在」は「当得」「禁得」(堪えられる, もちこたえられる)と同様。李群玉¹⁸³「洞庭乾二首 其二」(『全唐詩』卷570)「八月還平在, 魚蝦不用愁(八月還た平らかに在り, 魚蝦愁うを用いず)。「湖水八月還平着(湖水が八月にはまだ安定している)」の意。韓偓「春日日」(卷683)「把酒送春惆悵在, 年年三月病厭厭(酒を把り春を送り惆悵として在り, 年年三月 病厭厭たり)。「惆悵在」は「惆悵着」と同様。

②助詞。「哉」にあたる。

③助詞。「耳」にあたる。

④助詞。「矣」にあたる。李白「歷陽壯士勤將軍名思齊歌」(『全唐詩』卷167)「太古歷陽郡, 化為洪川在(太古の歷陽郡, 化して洪川と為る)。「化為洪川矣(大きな川となった)」の意。

⑤助詞。「些」にあたる。

⑥助詞。「啊」にあたる。杜甫「因許八奉寄江寧旻上人(許八に因りて江寧の旻上人に奉り寄す)」(『全唐詩』卷225)「聞君話我為官在, 頭白昏昏只醉眠(君の我に官と為りしを話すを聞く, 頭白くして昏昏として只醉眠す)。「聞君談起為官之事啊, 我無心為官, 只昏昏欲醉眠耳(あなたが仕官のことを話していたと聞いたよ, 私は仕官する気がないので, 酔っぱらってウトウトするばかりだが)」というのである。白居易「十年三月三十日, 別微之於灃上, 十四年三月十一日夜, 遇微之於峽中, 停舟夷陵, 三宿而別。言不尽者, 以詩終之。因賦七言十七韻以贈, 且欲記所遇之地与相見之時, 為他年会話張本也(十年三月三十日, 微之に灃上に別れ, 十余年三月十一日夜, 微之に峽中に遇い, 舟を夷陵に停め, 三宿して別る。言の尽くさざる者は, 詩を以て之を終う。因りて七言十七韻を賦して以て贈り, 且つ遇う所の地と相見るの時を記して, 他年会話の張本と為さんと欲するなり)」(『全唐詩』卷440)「未死会應相見在, 又知何地復何年(未だ死せずんば会はずに相見るべし, 又知らんや何れの地 復た何れの年なるを)」と同様。意味は上に同じ。「会應相見啊(きっと再会できるはずだよ)」と同様。齊己¹⁸⁴「謝元願上人遠寄檀溪集(元願上人の遠く檀溪集を寄せらるるに謝す)」(『全唐詩』卷844)「猶能為我相思在, 千里封來夢沢西(猶お能く我が為に相思せん, 千里封ぜられて来る夢沢の西)」

「為我相思啊（私のことを思っていてくれるね）」という意。

⑦助詞。「呢」「哩」にあたる。白居易「因夢得酬牛相公初到洛中小飲見贈（夢得に因りて牛相公の初めて洛中に到りて小飲し贈らるるに酬ゆ）」（『全唐詩』卷456）「詩酒放狂猶得在，莫欺白叟與劉君。（淮詩酒の放狂は猶お得たり，欺く莫かれ白叟と劉君とを）」、「詩酒都還來得呢（詩も酒もまだまだやれるぞ）」という意。白居易「病中詩十五首 就暖偶酌戲諸詩酒旧侶（暖に就きて偶酌し，諸もろの詩酒の旧侶に戯る）」（卷458）「細酌徐吟猶得在，旧遊未必便相忘（細く酌み徐ろに吟ずるは猶お得たり，旧遊未だ必ずしも便ち相忘れず）」、語意は上に同じ。白居易「別春炉」（卷446）「晚風猶冷在，夜火且留看（晩風 猶お冷ややかに，夜火 且らく留め見る）」「猶冷呢（まだ寒いね）」という意。

⑧助詞。「也」にあたる。

⑨助詞のように見えて実はそうでないもの。杜甫「絶句漫興九首」其六（『全唐詩』卷227）「懶慢無堪不出村，呼兒日在掩柴門。（懶慢堪うる無く村を出せず，兒を呼び日在に柴門を掩わしむ。）」このような「在」の用法は「在処」のような語句が，どこでも，いたるところで，ところどころを意味することから解することができる。「日在」は日を追って，日々というのである。特に「日在」は文字が転倒しており，「古詩十九首」其一（『文選』卷29）の「相去日已遠，衣帶日已緩（相去ること日びに已に遠く，衣帶日びに已に緩し。）」の句法を彷彿とさせる。「日在掩」とは「日日如此做（日々このようにしている）」というのである。

⑩動詞。「任」「隨」。杜甫「奉和賈至舍人早朝大明宮（賈至舍人の早に大明宮に朝すに和し奉る）」（『全唐詩』卷225）「朝罷香煙携滿袖，詩成珠玉在揮毫（朝罷みて香煙携えて袖に満ち，詩成りて珠玉 毫を揮うに在す）」、「任揮毫（毫を揮うに任す）」と同様。韋應物「林園晚霽」（『全唐詩』卷191）「山多煙鳥亂，林清風景翻。提携唯子弟，蕭散在琴言（山多くして煙鳥亂れ，林清くして風景翻る。提携するは唯子弟のみ，蕭散するは琴言に在す）」、「或弾或談笑各隨己意（琴を弾いたり談笑したり，それぞれ心に従っている）」という意。

「任」「隨」を表す「在」は，秦漢以降の典籍にもしばしば見られる。『史記』卷六十九・蘇秦伝「臣請令山東之國……委社稷，奉宗廟，練士厲兵，在大王之所用之（臣請う山東の國をして……社稷を委ね，宗廟を奉り，士を練し兵を厲し，大王の之を用うる所に在わしめん）。『顔氏家訓』¹⁸⁵ 文章「陳孔璋居袁裁書，則呼操為豺狼，在魏製檄，則目紹為蛇虺。在時君所命，不得自專，然亦文人之巨患也（陳孔璋 袁に居りて書を裁すれば，則ち操を呼びて豺狼と為し，魏に在りて檄を製すれば，則ち紹を目して蛇虺と為す。時の君の命ずる所に在せ，自ら専らにするを得ず，然るも亦た文人の巨患なり）。（後魏）賈思『齊民要術』¹⁸⁶ 八和齋「搏作圓子，大如李，或餅子，任在人意也（搏ちて圓子を作し，大なること李の如く，或いは餅子，人の意に任在す）。また，[隨在][在処]を見よ。

⑪指示代名詞。「本」「此」「該」の意（「該」は「該生」「該地」の「該」。「当」とほぼ同じ。孫光憲¹⁸⁷「竹枝詞二首」其二（『全唐詩』卷762）「楊柳在身垂意緒，藕花落盡見蓮心（楊柳在身意緒を垂れ，藕花落ち尽くして蓮心を見る）」、「在身」は「本身」「自身」と同様。（長谷川）

29. 隨在 suízài

「任」「隨」にあたる。「在」に「隨」の意味があるため，「隨」「在」もまたしばしば連続して同じ意味を重ねる複合語を構成する。また，「隨在」の語は，現在の四川省方言にも依然存在し，「任憑（まかせる）」の意味にも変化がない。【在】⑩を見よ。（長谷川）

30. 在処 zàichù

「到処」「隨処」。賈島「贈某翰林（某翰林に贈る）」¹⁸⁸（『全唐詩』卷574）「看花在処多隨駕，召宴無時不及

身(清重と花を看るに在る処に随駕多く、召宴時無くして身に及ばず)。張籍「贈別王侍御赴任陝州司馬(王侍御の陝州司馬に赴任するに贈別す)」(『全唐詩』卷385)「京城在処閑人少、唯共君行並馬蹄(京城在る処に閑人少なく、唯だ君と共にきて馬蹄を並ぶ)」、「喜王起侍郎放牒(王起侍郎の放牒せらるるを喜ぶ)」(『全唐詩』卷385)「誰家不借花園看、在処多將酒器行(誰家か花園を借りて看ざらん、在る処多く酒器を將て行く)」。許棠¹⁸⁹「写懷」(『全唐詩』卷604)「在処有岐路、何人無別離(在る処岐路有り、何人か別離無からん)」。薛逢¹⁹⁰「六街塵」(『全唐詩』卷548)「六街塵起鼓咚咚、馬足車輪在処通(六街塵起こりて鼓咚咚、馬足車輪在る処に通ず)」。崔塗¹⁹¹「蜀城春」(卷679)「在処有芳草、滿城無故人(在る処芳草有り、滿城故人無し)」。【在】⑩を見よ。(長谷川)

おわりに

以上、30の用例を訳出してきた。例えば「独」「動」等の副詞の用法は種類が大変多い。また「到」「道」には動詞、副詞及び助詞の用法、「透」にも動詞と形容詞というように、語彙によっては複数の品詞の用法があり、それぞれ詩中における機能が異なるため、読み方を改めなければならない。つまり従来の辞書的な読みではなく、その詩に則した読み方をすることで、その詩全体の解釈が大きく変わってくるのである。その他、「随在」という、方言として現代まで伝わっている語も特徴的である。全用例に共通するのは、対句と互文に異読語彙の用例が多いということである。

今後も唐詩の用例を中心としてこの訳出検討作業を進め、異読語彙の全体像を把握することを目標としている。またその過程で、個別の詩人における用法の特徴や、時代や地方に共通する傾向を見出したいと考えている。しかし用例が膨大なため、誤読の可能性もある。ご示教を仰ぐ次第である。

付記

本稿は平成28～31年度文部科学省助成金科学研究費基盤研究C「唐詩における異読の包括的研究」(研究代表者 東京学芸大学佐藤正光)における研究成果のひとつである。

注

- 1 『史記』卷70「張儀列伝」の注。
- 2 白居易(772-846)、字は楽天、号は香山居士。原籍は下邳(陝西省渭南県)、河南新鄭(鄭州新鄭)のひとつ。
- 3 王貞白の誤り。王貞白は(875-?)、字は有道、永豊(江西省広豊県)のひとつ。
- 4 竹の名。
- 5 原文に「芭棚下副槽」とある。
- 6 北宋・郭茂倩撰『樂府詩集』(中華書局、1979年)。
- 7 高適(700-765)、字は達夫、渤海(河北省景県)のひとつ。
- 8 岑参(715?-770)、字は不明、南陽(河南省南陽市)のひとつ。
- 9 杜甫(712-770)、字は子美、原籍は河南省鞏県、襄陽(河南省洛陽市南)のひとつ。
- 10 一家全員。
- 11 危険な道。
- 12 杜儼(生卒年不詳)、字は不詳、天宝頃のひとつ。
- 13 李白(701-762)、字は太白、号は青蓮居士。西域に生まれ、幼少期に蜀の青蓮郷(四川省江油県)に移り住んだと言われる。
- 14 宋之問(656?-712?)、字は延清、汾州隰城(山西省汾陽市)のひとつ。
- 15 孫逖(696-761)、博州武水(東昌府区沙鎮)のひとつ。
- 16 孟浩然(689-740)、襄陽(湖北省襄陽市)のひとつ。
- 17 魚があぎと(えら)をさらすこと。龍門を上って龍となることができなかつた魚があぎとをさらすことで、志望の達せられない喩。

- 18 楊衡 (生卒年不詳, 766年頃のひと), 字は仲師, 吳興のひと。
- 19 羅隱 (833-909), 本名は横, 字は昭諫, 新城 (浙江省富陽) のひと。一族の羅鄴, 羅虬と共に「三羅」と呼ばれる。
- 20 青緑色の油やうるしで壁面を塗った女性用の車。
- 21 蘇小小。銭塘の名妓の名。
- 22 郭元振 (656-713), 名は震, 字は元振, 魏州貴郷 (河北省邯鄲市) のひと。
- 23 『晋書』卷三十六「張華伝」に「初, 吳之未滅也, 斗牛之間常有紫氣, 道術者皆以吳方強盛, 未可因也, 惟華以為不然。及吳平之後, 紫氣愈明。華聞予章人雷煥妙達緯象, 乃要煥宿, 屏人曰「可共尋天文, 知將來吉凶。」因登樓仰觀。煥曰「僕察之久矣, 惟斗牛之間頗有異氣。」華曰「是何祥也」煥曰「宝剑之精, 上徹於天耳。」華曰「君言得之。吾少時有相者言, 吾年出六十, 位登三事, 當得宝剑佩之。斯言豈効乎」因問曰:「在何郡」煥曰「在予章豐城。」華曰「欲屈君為宰, 密共尋之, 可乎」煥許之。華大喜, 即補煥為豐城令。煥到郡, 掘獄屋基, 入地四丈余, 得一石函, 光氣非常, 中有双劍, 並刻題, 一曰竜泉, 一曰太阿。其夕, 斗牛間氣不復見焉。煥以南昌西山北巖下土以拭劍, 光芒艷發。」
- 24 劉長卿 (?-789?), 字は文房, 河間 (河北省) のひと。
- 25 王翰 (687-726), 字は子羽, 并州晋陽 (山西省太原市) のひと。
- 26 盧蔵用 (生卒年不詳), 字は子潜, 幽州范陽 (北京市) のひと。
- 27 『全唐詩』は「開」に作る (詩題に「得開字」とある)。
- 28 茱萸。かわはじかみ。陰曆九月九日の重陽の節句には, 実のついた枝を頭にさして邪気を払う風習があった。
- 29 朱慶餘 (生卒年不詳), 名は可久, 字は慶余, 越州 (浙江省紹興) のひと。
- 30 常建 (生卒年不詳), 字は不明, 邢州 (河北省邢台市) のひと。
- 31 遼欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』(中華書局, 1983年)。
- 32 王湾 (693-751?), 字は不詳, 洛陽 (河南省洛陽市) のひと。
- 33 昔の地名。今の新疆輪台の南。
- 34 陸龜蒙 (?-881), 字は魯望, 蘇州吳県 (蘇州市) のひと。
- 35 檜の老木。
- 36 杜荀鶴 (846?-906?), 字は彦之, 九華人と号する。池州石埭 (安徽省石台県) のひと。
- 37 陳・徐陵撰・清・吳兆宜注『玉台新詠箋注』(中華書局, 1985年)。
- 38 劉言史 (742?-813?), 趙州邯鄲のひと。
- 39 三伏 (初伏・中伏・末伏) の総称。最も暑い時期。
- 40 武元衡 (758-815), 字は伯蒼, 緱氏 (河南省偃師) のひと。
- 41 青油を作る烏臼木 (ナンキンハゼ) の絹で作った幕。
- 42 皮日休 (838?-883?), 字は襲美, 一に逸少, 襄陽 (湖北省襄陽市) のひと。
- 43 陸龜蒙 (?-881) の字。
- 44 『全唐詩』は「有」に作る。
- 45 樂器内の発声の具。
- 46 元稹 (779-831), 字は微之, 河南洛陽 (河南省洛陽市) のひと。
- 47 戴叔倫 (732?-789?), 字は幼公 (または次公), 潤州金壇 (江蘇省) のひと。
- 48 『全唐詩』は「鷓」に作る。
- 49 鄭谷 (851?-910?), 字は守愚, 江西宜春市袁州区のひと。
- 50 沈佺期 (656?-715?), 字は雲卿, 相州内黄 (河南省安陽市内黄県) のひと。
- 51 『樂府詩集』は「日」に作る。
- 52 「覺」は一に「獨」に作る。ちょっとした眠りのことを「一覺」という。
- 53 漢の平当と陳翁生のこと。
- 54 地名。江蘇省揚州北郊外。隋の煬帝はここに埋葬されたといわれる。
- 55 謝靈運 (385-433), 名は公議, 字は靈運, 陳郡陽夏 (河南省太康県) のひと。
- 56 『文選』(上海古籍出版社, 1986年)。
- 57 錢起 (722?-780), 字は仲文, 吳興 (浙江省湖州市) のひと。
- 58 李端 (737-784), 字は正已, 趙郡李氏東祖房のひと。

- 59 丁令威。仙術を学び鶴になって飛び去り千年後に家に帰ってきた(『搜神後記』巻1)。
- 60 清・楊倫箋注『杜詩鏡詮』(上海古籍出版社, 1980年)。
- 61 杜牧(803-852), 字は牧之, 京兆万年(陝西省西安市)のひと。
- 62 姚合(779?-855?), 陝州(河南省陝県)のひと。
- 63 黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』(中華書局, 1997年)所収。但し『校注』では原文を「身患」に作る。
- 64 漢・劉向撰・向宗魯校証『説苑校証』(中華書局, 1987年)。
- 65 羅虬(生卒年不詳), 字は不詳, 台州(浙江省臨海市)のひと。
- 66 仙女の名。詩題にいう唐代の名妓杜紅児を擬えていう。
- 67 秦韜玉(生卒年不詳), 唐のひと, 字は仲明, 京兆(陝西省西安市)のひと。
- 68 総じて(『詩詞曲語辭典』「都来」の項の意味と同じ)。
- 69 李商隱(812-858), 字は義山, 号は玉谿生, 懷州河内(河南省沁陽市)のひと。
- 70 前漢の張放が十三歳で祖父張安世の富平侯の爵位を継承したことをいう。
- 71 韋応物(736?-791?), 長安(陝西省西安市)のひと。
- 72 薛濤(768-831), 字は洪度または宏度, 長安(陝西省西安市)のひと。
- 73 呉融(生卒年不詳), 字は子華, 越州(浙江省紹興市)のひと。
- 74 『全唐詩』は「簷」に作る。
- 75 姚培謙『李義山詩集箋注』(中文出版社影印本, 1979年)。
- 76 美人のこと。
- 77 曹松(830?-901?), 字は夢徴, 舒州(安徽省潜山市)のひと。
- 78 将棋のこと。
- 79 『全唐詩』は「馬」に作る。
- 80 李頻(818?-876?), 字は徳新, 寿昌(浙江省建徳市)のひと。
- 81 馬戴(799-869), 字は虞臣, 定州曲陽(今河北省曲陽県)のひと。
- 82 韓琮(生卒年不詳), 宣宗大中年間(847-859)頃のひと。
- 83 隕石のこと。
- 84 草が生い茂る様子。
- 85 水の静かな様子。
- 86 高蟾(生卒年不詳), 河朔(河北省)のひと。
- 87 草木が風に吹かれる音。
- 88 高雅な情緒。
- 89 漏永は長い時間が過ぎること, 沈沈は夜がしめやかにふけていく様。
- 90 王僧孺(465-522), 南朝梁のひと, 東海郟(山東省郟城県)のひと。
- 91 『玉台新詠箋注』は「工」に作る。
- 92 『全唐詩』は「聞夫杜羔登第(一作聞杜羔登第又寄)」に作る。
- 93 韓偓(844-923), 字は致堯(一説に致光), 京兆万年県(陝西省西安市)のひと。
- 94 許渾(791?-858?), 字は用晦, 潤州丹陽(江蘇省丹陽県)のひと。
- 95 『樂府詩集』所収。
- 96 『樂府詩集』は「由」に作る。
- 97 水がちよろちよろと流れる様子。
- 98 孟郊(751-814), 字は東野, 湖州武康(浙江德清県)のひと。
- 99 柳宗元(773-819), 字は子厚, 河東(山西省永濟県)のひと。
- 100 正しい心を持ち続けること。
- 101 争う様子。
- 102 注6『樂府詩集』所収。
- 103 張説(667-730), 字は道濟(一説に説之), 洛陽(河南省洛陽市)のひと。
- 104 大きく張り出した松の形容。

- 105 趙嘏 (806?-853?), 字は承佑, 楚州山陽 (江蘇省淮安市淮安区) のひと。
- 106 楊凝 (生卒年不詳), 字は懋功, 虢州弘農 (河南省三門峽市) のひと。
- 107 司空図 (837-908), 字は表聖, 河中郡虞郷 (山西省永濟県) のひと。
- 108 何遜 (生卒年不詳), 梁のひと, 字は仲言, 東海郷 (山東省蘭陵県長城鎮) のひと。
- 109 ならぐ。刀を鍛えるために鉄を熱して水を入れること。
- 110 繰り返すこと。
- 111 王仁裕 (880-956), 字は德輦, 秦州上邽 (甘肅省天水) のひと。
- 112 韓愈 (768-824), 字は退之, 鄧州南陽 (河南省孟州市) のひと。
- 113 西王母の使者の青い鳥で, 詩中では富家の若者が華山の娘に思いを伝えるための使者。
- 114 漢・司馬遷撰『史記』(中華書局, 1959年)。
- 115 王建 (?-830), 字は仲初, 潁川 (河南省許昌) のひと。
- 116 『全唐詩』は句のはじめに「重重」の二語がある。
- 117 張籍 (766?-830?), 字は文昌, 呉郡 (蘇州) のひと。
- 118 『全唐詩』は「頼」に作る。
- 119 『全唐詩』は「開」に作る。
- 120 短時間のこと。
- 121 数が多いこと。
- 122 任半塘『敦煌歌辭総編』(上海古籍出版社, 1987年)所収。
- 123 施肩吾 (780-861), 字は希聖, 号は東斎, 杭州府新城県 (富陽洞橋鎮賢徳村) のひと。
- 124 独孤及 (725-777), 字は至之, 洛陽 (河南省洛陽市) のひと。
- 125 何れの月, 何月。
- 126 『全唐詩』は「判」に作る。
- 127 劉商 (生卒年不詳), 字は子夏, 彭城 (江蘇省徐州) のひと。
- 128 張喬 (生卒年不詳), 字は伯遷, 池州 (安徽省池州市貴池区) のひと。
- 129 声母の同じ語が, 韻母のみ変化すること。王念孫『広雅疏証』に「而, 如, 若, 然, 一声之転也。」とある。
- 130 『全唐詩』は「菊」に作る。
- 131 『顔魯公文集』(四部叢刊初編, 上海書店, 1989年)。
- 132 李珣 (855?-930?), 字は德潤または廷儀, 梓州 (四川省三台) のひと。
- 133 附属する。
- 134 ざわざわとして不安定な様子。
- 135 『全唐詩』は「懷錦水居止 (錦水の居止を懐う) 二首」其一。
- 136 『全唐詩』は「誰」に作る。
- 137 『全唐詩』は「平生」に作る。
- 138 土地の老人。
- 139 『全唐詩』は「寄」に作る。
- 140 飼馬桶のこと。
- 141 韓翃 (生卒年不詳), 字は君平, 南陽 (河南省南陽) のひと。
- 142 李紳 (772-846), 字は公垂, 亳州 (安徽省) のひと。
- 143 顧非熊 (836年前後在世), 字不詳, 姑蘇 (江蘇省蘇州市) のひと。
- 144 温庭筠 (812-872), 字は飛卿, 并州太原 (山西省) のひと。
- 145 枯れた木々を粉々にすること。ここでは大風によって小舟が壊れること。
- 146 『杜詩詳註』巻22。
- 147 粗末な布の布団。
- 148 劉禹錫 (772-842), 字は夢得, 中山 (河北省定州市) のひと, 一説には彭城 (江蘇省徐州市) のひと。
- 149 故郷に帰り父母に孝行すること。
- 150 高官や博士が被る冠。

- 151 『全唐詩』は「瀟湘柁」に作る。
- 152 李白はかつて金馬門で天子に仕えていたことを指す。
- 153 許宣平(生卒年不詳), 新安郡歙県(安徽省)のひと。
- 154 『全唐詩』は「見李白詩又吟」に作る。
- 155 寒山(生卒年不詳) 晩唐のひと。浙江省天台山の国清寺にいたとされる僧侶。
- 156 羅鄴(825-?), 字は不詳, 余杭(浙江省)のひと。
- 157 李涉 晩唐の詩人, 号は清谿子, 洛陽のひと。
- 158 方干(809-888), 字は雄飛, 号は玄英, 睦州青溪(淳安)のひと。
- 159 蔡希寂, 盛唐の詩人, 字は季深, 潤州丹陽(江蘇省曲阿)のひと。
- 160 青葉の陰のこと。
- 161 『古漢語研究』1990年第3期所収。
- 162 学問を修め続けること。
- 163 王梵志(生卒年不詳), 仏教詩人, 黎陽(河南省浚県)のひととされる。
- 164 李頎(690-751?), 東川(雲南省会沢)のひと。
- 165 撫でさすること。
- 166 貧乏な家庭のこと。
- 167 顧況(725-814?), 字は逋翁, 号は華陽山人, 蘇州(江蘇省)のひと。
- 168 盧仝(?-835), 字は不明, 号は玉川子, 范陽(河北省)のひと。
- 169 米を使って売買をすること。
- 170 先に金を借り入れて購入すること。
- 171 仏教上での罪。
- 172 徐延寿(生卒年不詳), 盛唐の処士, 江寧(江蘇省)のひと。
- 173 李益(748-827), 字は君虞, 鄭州のひと。
- 174 花蕊夫人(生卒年不詳), 後蜀の孟昶の妃, 後に北宋の皇帝太祖(趙匡胤)の妃。
- 175 戎昱(744-800), 荊州(湖北省江陵)のひと。
- 176 崔立之(生卒年不詳), 名は斯立, 立之は字, 博陵(河北省定県)のひと。
- 177 水の流れが滞ること。『全唐詩』は「屈盤」に作る。
- 178 李煜(937-978), 南唐の中主李璟の第六子, 初め名は從嘉, 字は重光, 号は鐘隱, 蓮峰居士, 彭城(江蘇省徐州銅山区)のひと。南唐の最後の皇帝。
- 179 占めつくすこと。
- 180 徐陵(507-583) 陳, 東海郷のひと。著に『玉台新詠』がある。
- 181 薛能(817-880) 字は大拙, 汾州(山西省)のひと。
- 182 現代中国語における状態をあらわす補語。
- 183 李群玉(813-860), 字は文玉, 澧州(湖南省)のひと。
- 184 齊己(863-937), 晩唐の詩僧。俗名胡德生。江南道潭州(長沙)のひと。
- 185 『四部叢刊』所収
- 186 『四部叢刊』所収
- 187 孫光憲(896-968), 字は孟文, 陵州貴平(四川省)のひと。
- 188 賈島(779-843), 字は浪仙, 范陽(河北省)のひと。一に朱慶余(797-?, 慶余は字, 名は可久, 越州のひと)の作とし「上翰林蔣防舍人(翰林蔣防舍人に上る)」に作る。(『全唐詩』巻514)
- 189 許棠(生卒年不詳), 唐のひと, 字は文化, 宣州(安徽省)のひと。
- 190 薛逢(生卒年不詳), 唐のひと, 字は陶臣, 蒲州(山西省)のひと。
- 191 崔塗(854-?), 字は礼山, 浙江のひと。

On Distinctive Usage of Poems in Tang (唐) Dynasty from SHICIQUYUCICIDIAN
(詩詞曲語辭辭典) Edited by Zhonghua Shuju (中華書局) Vol.4

Masamitsu SATO*¹, Miki TAKAHASHI*², Daisuke ARIKI*³,
Satoshi NISHIMURA*⁴ and Masashi HASEGAWA*⁵

Chinese Classics

(Received for Publication; August 27, 2018)

Abstract

This paper analyzed special usage of a Chinese poem of Tang dynasty. On the poetry and the play words from the Tang dynasty to Jin, Yuan, Ming dynasty, it depends on influence of the time, locality and a social class, slang, spoken language and a dialect are included. Those are different from the orthodox meaning, necessary to grasp the meaning of the special vocabulary (It's called "idoku" in this paper) to interpret precisely. So we tried using the "SHICIQUYUCICIDIAN (詩詞曲語辭辭典)" edited by Zhonghuashuju (中華書局) which includes usage of "idoku" much.

As a result of the consideration, We founded examples and vocabulary with the meaning of a word different in plural. In particular, because of particles that interpretation is of the whole poetry, we re-recognized the importance of the fixation of the meaning of a word. It's that there is a lot of "idoku" in an antithesis and usage of gobun (互文) to be common to whole examples. And the meaning of those words were succeeded from Tang and Song poetry to Yuan play words.

Key words: Chinese poem, Tang poetry, "idoku", poetic vocabulary

*1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

*2 Ibaraki women's junior college (960-2, Higashi kinokura, Naka-shi, Ibaraki, 311-0114, Japan)

*3 Junior & Senior High School at Komaba, University of Tsukuba (4-7-1, Ikejiri, Setagaya-ku, Tokyo, 154-0001, Japan)

*4 Tokyo Gakugei University International Secondary School (5-22-1, Higashi Oizumi, Nerima-ku, Tokyo, 178-0063, Japan)

*5 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)